

そのデザイン 文化の盗用？

人気ファッションブランドのデザインなどが「文化の盗用ではないか」と批判される事例が後を絶たない。背景にどんな問題があるのか。作り手はどう向き合っているのか。

メキシコ大統領の妻が2022年10月、米国の人気ブランド「ローレン ラルフ・ローレン」の商品写真をインスタグラムに投稿した。店頭に並ぶカラフルなしま模様のカーディガンが先住民のデザインを模倣していると非難する内容だった。ブランドを運営するラルフ・ローレン・コーポレーションは「この商品がどのようにして売りに置かれたのか緊急の監査を行い、直ちに撤去されることを確認している」と釈明、謝罪した。日本の着物をめぐり論争が起きたこともある。米国の女性タレント、キム・カーダシアンさんが19年、自ら立ち上げた矯正下着のブランドに「キモノ」の名を付け、商標登録を申請した。ネット上では「文化の盗用ではないか」と批判があふれ、京都市は着物が「すべての人々共有の財産であり、私的に独占すべき



人気ブランドへ 民族衣装めぐり批判

ものではない」として、再考を促す文書を送り、ブランド名は最終的に「スキムズ」へと変わった。

ファッションは異文化に刺激を受け発展してきた。かつてのイヴ・サンローランやケンゾーは、中国やアフリカなど民族衣装から着想を得たデザインを発表し人気を誇った。インスピレーションを得ること、盗用の境はどこにあるのか。

「実は、文化の盗用に明確な定義はない」と、盗用問題に詳しい南山大法文学部の家田崇教授（会社法）は言う。家田教授によると、ファッションの分野では、自分が属さない文化の柄や文様などについて、本来の意味や歴史的な背景を理解せずに、第三者が利益を得るために利用した際に問題視されることが多い。ただ、その線引きはあいまいだ。「どこからが盗用かの判断が難しいのは、文化には明確な所有者がないからです。この問題を追及すると、文化は誰のものかという話に行き着く」

服飾史家の中野香織さんは、かつての宗主国や多数派が、旧植民地やマイノリティの文化を利用して利益を得ることに批判が集まりやすくと指摘する。「参照する文化との間に上下関係がある場合に問題になる。悪いと思っただけでやっている人はいないんです。インスピレーションを起すには、遠く離れたものを組み合わせるのと良いといわれています」

ローレン ラルフ・ローレンの服が先住民のデザインを模倣していると指摘する投稿



ユイマ・ナカザト23年春夏コレクションのブランド提供

て、そうした単純な発想から始まっている」

中野さんによると「文化の盗用」が問題視されるようになったのは15年ごろからで、SNSが顕著に発達した時期と重なる。中野さんは「近年の人権意識の高まりも影響しています。かつては盗用だと思っても騒ぎようがなかったし、ゆるやかな文化交流のように好意的に捉えられていたのでは」。

盗用を防ぐには、どんな対策や心構えが必要なのか。家田教授は、異文化を参照する際には、歴史や文化的な意味などを徹底的にリサーチして理解を深めることが大前提だと指摘する。「自分たちは敬意を込めているつもりでも、相手にはそう受け取られないこともある。リーガルチェックには限界があり、まずは作り手がよく考えることが大事だ」。中野さんは「企業やブランドは文化や倫理に詳しい専門職を置くべきだ」と話す。「徹底的なりサーチと丁寧なコミュニケーションを重ね、新しいものを対等な立場でつくる姿勢が必要ではないか」

ファッションデザイナーも手探りで創作している。パリ・オートクチュールコレクションに参加する中里唯馬さん

歴史や文化 理解深めるリサーチ重要

は、1月に発表した新作でアフリカを着想源に据えた。「リスクが大きいのではないかとチーム内でもすごく議論になった」と明かす。

コレクション制作にあたり、中里さんはスタッフとアフリカを訪ね、北ケニアの奥地に暮らす人々と直接対話し、伝統的な衣服や装飾品の持つ意味や歴史を教わった。「インターネットで手軽に調べられるのでは、相手に対するリスペクトがないと思った。クリエーションだけで突っ走るのは非常にリスクがあり、そこはすごく注意しました」

現地の人々が体に巻き付けていた布と着物文化の共通点を探ったり、鮮やかな色にインスピレーションを受けて生地を染色したりした。

手間とお金と時間をかけ、十分なリサーチをする重要性を改めて理解したという。「当事者から直接切迫感のある言葉を受け取るのは、文字を読むのとでは情報量が全く違う。やってはいけないことが何なのかもわかる」と話す。異文化から得たインスピレーションをダイレクトに表現するのはなく、自分のデザインへとどのように変換するのか。「それがそのデザイナーの力量ではないでしょうか」